

特 258

908

34

61

盛久

昭和改訂版
内十八



始



特258
908

盛久

(梗概) 平家没落の後主馬の判官盛久捕はれの身となり土屋三郎に送ら
 れ関東に下らんとする時、日頃信心を籠めたる京都清水の觀世音に詣
 て、最期の暇を乞ひ、やがて鎌倉に着きしも尚ほ讀經三昧の日を送り
 ぬ。かゝて盛久所刑の日となり由比の濱邊に引かれ行きしが此日頃讀
 經念佛の功德も不思議も太刀取の振り上げし太刀段々に折れて諸
 人の眼を驚かす所に頼朝公より赦免の使者あり盛久は御前に罷り出で
 舞ひなむ。觀世音の靈夢ありし旨物語り酒宴に移りてはかねて心得ありし舞を
 舞ひなむ。芽出度く赦されて退出しぬ。



シテ 主馬判官盛久

ワキ 土屋三郎

ワキヅレ 太刀取

奥昇 二人

所 前 京都清水
後 相摸國鎌倉

季 春

盛久

^{相_あき}是も鎌倉殿の御内子仕へ申_う下_{くだ}土屋乃

何某もく_い相_あと_と主馬判官盛久も

丹後國成相寺子深く思_おんで_い仕_しや_ひ

しを_あら_た案内者をも_あて安_{やす}こと生_な捕_と

中_ち只_{ただ}今_{いま}園_の東_のへ_い仕_しや_ひ _して_て _いう_は土_の屋_を

古の地を又いつくさるる道の成
 き東海ふとひさし我を名残なき
 かまじひさる馬はあま生れ 世よ隠
 まある身として思ひは外の旅乃及
 園の東よ赴けり白川を新渡のいづ
 ゆるべき旅ありま歩 爰に誰をり松坂や

四の宮河東回乃け 是や 是やけ行もゆる
 もがわいへん 急はともあぬもあ
 坂此園おも今乃我をぶよとめ 漸
 田の長橋歩渡りまよはる新の鏡山さ
 の三年魚の身あまきた おとろへ老藤の
 本村をふるや 濃尾張熱田の浦は夕

塩乃乃を波よかくされて浦をまき野
 色に唱海深又八橋や高柳山キヤア
 塩見坂橋本此濱名の橋を歩渡りヤ
 旅衣かくきて見んと思ひまや命ヤラハを
 里あり小坂此申山大下是くま上なる
 淵漱乃大井河もは流もろ乃山

越ても園よ清見海 三種此入海田子
 此浦赤おて見れは浦一なるは音の富
 士の根葉根山程めりや早月数をや
 塩倉よ名にきり中 夏申よ乃
 みてちん塵をい埃つ 実やそい中まも
 ちん塵をい埃つ

園東より名ぬ百年の業むの華中此後
一寸の光陰は沙塵に金実や古の雲
井乃よそ子世もと繋り一友人も
智侍世なれや家独り鎌倉山の雲
震実かほ身乃智ひありかくてなる
らして人は画をいひていひの天鳴ら
疾

きこまひにやあはれいそ一や盛人の
何事ならん独云を仰け上意乃趣
志事よ中さうやと存ひいうよ中け出
庭う系しては上てたを殿といやけさへ
出入りへ扱某うるる由を以扱を取れ
たりあきさん作おるるの中扱を取中しては

へバ大事の因人よく此程の程よく謀
 一申せよの事には
 此今も独々に申せよ
 面を
 といふ一申
 此今も
 此今も

うと俾出されては
 残惜
 此程乃清
 謀せし
 の念佛
 此程乃清
 謀せし
 の念佛

さうしういへぬは程清水の観世音を信
じまり、毎日法華經をよむとあり、然るに
今日未だ讀誦中しに程よ、そと讀誦
中夜に わかき 吏丁を召懸ふといふも乞
静よ讀誦誦し、土屋も是をせしむ中
さうするにさういふ 一 有難や大慈大悲

薩摩の由、定業亦能得ハ業薩摩乃
世道とや頼くハ縁の慈悲をたきて
家を引奪し給へ、今は此利益も一か
き、後生善所をも誰り頼まん、二世乃
釈尊も一室一くハ大聖此誓約置處
高小あゝむや モウ 或遭王難若刑歎来 ワフソウオ、ナンク、リンギヤウヨクジユ

終シユ念エ彼ビ觀クワン音オン力リキ刀トウ尋ジン候ク壞エ わき乃ナ雜ザ

やけに經を独ドク少ショ中チュウせむは命イノチをもたのめ

う了リウ世セにへ 實マコトよくは能ノ開ヒ物モノ式シキは文モン

乃ノ心ココロハ縦マシ人ヒト王オウ難ナンの災ガイよあふをさける

た候タウこよ壞ヤクき わき又マタ危キ惡アク意イ退タイ散サンといふ

文モンハ射ヤる矢ヤも其ソノ身ミよままままききれれだ

勝マカ於カ母ボ一ヒトやままががらら 中今イマく命イノチのノ為タメよよけ

文モンを誦ジュするルよ形カタチぞ 種タネと法ホウ無ム慈ジ地チ獄ゲク

鬼キ畜シユ生シユ生シユ老ラウ病ビョウ死シ苦ク似ニ漸ゼン意イ令レイ滅メツ

け文モン乃ノ如ニくクバ ヤア法ホウこの無ム慈ジををとと無ム乃ノ

ものモノづづるるべべししやや難ナンししとと夕セキ露ロのノ命イノチもも

おおしましまんんとと後ノチ生シユててううららががししたたまま ヤア

今更あつた成り果るを夢つてい^{あま}は

心そ異るを此やうを清前よして生かすや中

上^ク上^リ 夫不取正覚の正誓今以て始

あ^ハら^ハ日^ニ過^ス去^リ遠^ク乃^チ大^ニ悲^シ此^ノ光^ハい^づく^不

到^ルの^可な^らん^上 然^ルよ^ク成^ルは^光陰^を

た^ニの^ニ日^ニ更^ニ躬^を苦^シむ^ルに^おこ^しま^す日^ニ彼^レ以^テ經

を修^ス讀^シせ^しに^取分^け時^を刑^ノ戮^ヲを^た

身^をお^もつ^て序^ノ時^を怠^ルる^事も^なく

初^メ更^ニる^後夜^の一^点を^精純^とし

て^座し^りに^歩 六^六窓^窓を^まい^りの^め

ぎ^るに^から^せん^は一^天き^まめ^らる^る

ち^よお^もい^ふも^ハ旬^をた^け結^ひぬ^と見^ゆ

ハサセ給ふ老僧の香深乃髪ゆ衣をうけ
水晶乃珠数をつまぐり鳩の杖よまがり
洗くまうもんだら—手はあうよて我を
洛陽東山乃清水の當りよまら汝が為
よ来りしるま本より大慈大悲の誓願
さどらま—か—ん—只—音をり運も我を

念むる時その王難乃笑ひ道るべ—
況汝年月 多年の真を抽て—
心人よまらえし—心易く思ふべ—
汝が命に誓るべ—とのたまひてまら別
そよたりまら久きく思ひて教を乃
心限りあ— 頼射是を—

け曉のぼる光も同じ告ごとあつた成
 津信感も限りありヤラ其時盛久の友
 乃さあたるん地して感涙をいあふはあ
 を強まされ田上いかに盛久志をいとして
 清ら着をあげて百る事ギョレシ論方もあつた
 盛久がヤラ命いふ秋万歳の表を祝ふぞ
田上

と清ら着を下さるれば上狩いふ世持いふ
中葉はあ 花を誇ふるもきいたる家

わきいふ盛久は前よりわき盛久の平家譜

代乃侍武略のまき者、生外礼舞、カシラウ徳能
 の由君守しる及されり、一年、小松殿

上北山葺物控路乃、酒宴あひひく、主

馬乃盛久一曲して事、園東も
 隠きなり、^{ハシ}殊更乞ひ悦び乃折なきま
 唯一指とのは可なり、^{ハシ}意ひて仕りゆ
 何と^{して}は前より舞をまゝとらや ^{あま}申こ
 の事 ^{して} 有難く、得難きも時
 去難き^{ハシ}を命^キて盛久初る時そはよ阿

ふ事、世のつゝ隠きまへ^上は治り香
 ひく時なれや、天は海乃うちの人
 の國と日乃本此もろま、^{ハシ}あるも世所
 酒^上のあまらさのまよ乃真くくめぬ
 日影のとりみく、^ヤ君を後か子秋の鶴
 園乃^{ヤア}松此をの教^{ヤア}失せして正来れ^ヤう

349
619

所有權 他種

昭和十年十月廿五日印刷
昭和十年十月三十日發行

定價金五拾錢

東京市下谷區上根岸町八十二番地

著作者 寶生新

東京市京橋區銀座西六丁目三番地

發行兼印刷者 江島伊兵衛

發行所 下掛寶生流謠本刊行會

なぐらゐの忍^ニま^ハあ^ハ理^ニく^ハと^ハ終^リ中^ツ
かま^ツ里^マ退^クお^ハけ^ル盛^久の^ハ心^忠肉^そ
ゆ^ハり^おく

終

廿五

終

